

日本を外へ向けて

——世界思想史の一課題——

中村 元

世界に広く眼を向けてわれわれの日本を反省し評価するということが、現在われわれに課せられている大きな課題である。

明治維新以前には日本は鎖国状態にあり、世界から孤立していた、と一般に考えられていたが、決してそうではない。ひろく外の世界とつながっていた。最近知り得た二つの事例を紹介しよう。

日蓮の弟子・日持上人が大陸に伝道を志して北海道の白老から樺太を経てアジア大陸に赴いたという伝説があったが、昭和のはじめに北支の宣化で、日持上人所持の法華経マンダラ、日蓮上人図像と称するものなどが発見され、日本に将来され、故前島信次教授が研究した。ところで本年東大の宇宙線研究所、原子力センターなどの八人の学者が三友量順教授と協力して放射性炭素年代測定を行ったところ、西暦一三〇〇年前後（プラス・マイナス三五〇年のあいだ）のものと判明した。この古い時代にアジア大陸に日

蓮の「南無妙法蓮華経」をひろめていた伝道僧がいたのである。

また天正十五年（一五八七年）に伴天連が国外退去を命ぜられる前の一七年間、長崎は実質的にはローマ法王の領地であり、神社仏閣はすべて焼き払われ、住民はすべてキリシタン宗門への改宗が強制され、肯んじない者は処刑された。ここには「かくれ仏教徒」の問題があったのである。

こういうことを思うと、日本の思想史は世界史の一環として考えるべきであらう。

最近のインド哲学研究の最尖端の学者たち、例えばベンシルヴァニア大学のモーハンティ、インドのジャイプル大学副学長ダヤー・クリシュナのごとき人々は「インド哲学」なるものは存在しないと主張している。地域的あるいは民族的な制約をつけたら、それはもはや「哲学」ではないというのである。ちょうど戦時中

に「ナチス数学」なるものがあるが、戦争が終ると雲散霧消してしまつたようなものである。この論理を以てするならば、「ドイツ哲学」というものもあり得ないし、「イギリス哲学」というものもあり得ないことになる。最近代の傑出せる哲学者・ウィトゲンシュタインはいつたどの国の哲学者と呼んだらよいのであろうか？

第二次世界大戦前のわが国の多くの学者たちは、日本は万国に冠たる皇国であると称していた。戦後のいわゆる進歩的知識人たちは、日本は西洋人の尺度に合わないから、奇型的な、変な国だと考えている。

しかしそれはどちらも誤りである。日本の思想史は世界思想史の一環なのである。

日本の神話は、最古の日本人の生活の中から生まれた最初の精神の投影であるが、全く関係が無いと思われているギリシア神話と非常によく似ている。日本の古代宗教もギリシアのそれも、ともに多神教であつて、人間をとり巻く自然界の諸事象のうちに、あるいはその背後に神々の存在を想定し、それらに対して畏敬の念を以て、献供の儀式を行った。

この特徴は、世界の諸民族についてあまねく認められることであり、献供の儀式も良く似ている。太陽を神化して（天照大神）、統治者がその子孫であると考えた神話は、諸民族において伝えられている。（アメリカ大陸のインカ族の場合は有名である。）日本

神話を軸としてこの点を詳細に実証したのは、加藤玄智『神道の宗教発達史的研究』である。神々のすがたは、人間を巨人化・美化・理想化したものであつた。

インド文明は仏教を通じて日本と関係をもつに至つたと考えられているが、仏教と無関係なはずのヴェーダ神話ないしヒンドゥー教神話が、日本の記紀の神話と非常に良く類似している。その類似点を指摘して、スイスのローザンヌ大学教授エルベール（Jean Herbert）の著した『Shinto』(神道) と言う書では、その巻末に類似点のリストを掲載している。

古代人は供儀の儀式を行うことによって、現世の幸福、子孫の繁栄にあずかろうとした。神々にささげる供物は、人間の投影としての神々が欲するであろうところの品物であつた。その儀式の次第までもよく似ている。祭場へ神々を勧請することから始まり、儀式が終わると、神々は天に帰る。

やがて宇宙創造神話が考えられるようになる。「くらげなす漂えるものより葦かびのごとく萌え出る」生命に対応して、インドのリグ・ヴェーダでは、一面に漂う大水の中から愛欲によって宇宙が生まれ出た、と説く。

やがて諸方の豪族が統一されて、大和王朝に従属するに至る。それと共に普遍宗教としての仏教が入つて来て、国家に精神的基礎を与えることになった。その絢爛たる開花は聖徳太子の治世である。かれは、その歴史的意義において、インドのアシールカ王、

チベットのソンツェンガンボ王と同じ範型を示している。南アジアでは、それよりも遅れて、それぞれの国家統一とともに、同様の帝王が出現した。ビルマではアナウラーター王（一〇四四—一〇八八）、カンボジアでは、ジャヤヴァルマン七世（一一八一—一二一五）、タイではラーマ王（一三〇〇年ころ）が同じ類型に属する。朝鮮半島全体を統一したのは新羅の王朝である。西洋でこれらに対応する帝王はコンスタンチヌス帝（三〇六—三三七）である。カール大帝も部分的に対比すべきであろう。

国家統一の成立とともに王朝の文化が成立する。特に王朝宮廷の文化は、平安朝において絶頂に達した。

日本の飛鳥奈良から平安に至る時代は、インドのクシャーナ王朝、グプタ王朝、ならびにそれを継承する諸王朝と、シナの隋唐の王朝と、ほぼ同類型であるとともに、それらの文化がいちじるしく類似している。西洋ではカロリング朝（七五一年以降）の宮廷文化が対比するべきであろうが、ただし、カロリング朝をインドではイスラーム諸王朝と対比すべきであるとの意見もある（Walter Ruben: "Das indische Mittelalter" の説）。

平安朝の文化は、グプタ王朝とともに、優雅典麗であり、修辭学的な技法も発達した。万葉の歌謡は、つねに生の現実を謳歌し、みなぎる生命をそのまま歌い上げていたが、平安朝の文芸は、美の憧憬へと移って行き、美に耽溺する唯美主義となった。しかしやがて人生の享樂のはかないことに気づき、宗教的なものを志向

し、やがて弥陀来迎を欣求するに至る。藤田健治博士の所論（『光と影のい』日本精神史における理念の形態）によると、平安朝の文芸はロマンチズムであり、日本における唯美主義は西洋のそれとは異なるが、日本におけるロマンチズムの一般的な推移は西洋におけるそれと同様の経過をたどっている。両者は時代を異にするが、類型としては同じであり、やがてついに宗教的なものに向かった。夢幻の世界に耽溺することもよく似ている。また紫式部の源氏物語（蜚の巻）に出て来る物語論は、アリステレスの詩と歴史との比較（『詩学』第九章）と、類型的可能性としては一致するものである。

奈良時代の仏教は国家仏教であったから、大毘盧舍那仏の中に万法の統一を見るときにも、諸国の国分寺においてその分化を見ることになる。護国的色彩の濃い經典が特に読誦された。しかし他面では内心の救いを求める傾向もあり、すでに天寿国曼荼羅には「世間虚仮、唯仏是真」と表現されている。

空海に表明された真言密教の修行は「入我我入」といえるであろうか。それはプロテイノスのエクスタシス（靈魂が肉体から脱すること）とエントウーシアスモス（神が礼拝者の中に入ってくること）の体験に対応するものである。

最澄の宗教体系は多面的であるが、かれの説いた「忘己利他」はトマス・ア・ケンピスの「キリストのまねび」に対応さるべきであろう。

仏のすがたを念ずる念仏三昧の行から、やがて阿弥陀仏の名号を唱える念仏行が盛んとなり、空也に代表されるが、西洋ではギリシアのアトス山の僧院ではキリストの名を称えることが今日まで盛んに行われている。

極楽浄土の荘厳さと地獄の恐ろしさを伝えるという点では源信僧都の『往生要集』は非常に影響力が大きかったが、それは西欧におけるダンテの『神曲』に対比さるべきである。

信仰の意義を特に強調し、称名念仏のみを説いたという点で、法然は他力信仰を徹底させた。その結果、親鸞は聖道門の戒行を省みる必要の無いことを明言し、またそのとおり実行した。この点はルターの「キリスト者の自由」に対比さるべきである。煩惱具足の身のままで救われ、信のみを強調した点は、シュライエルマッヒアの主張した「ただひとえに神にすべてを委ねること」(Schlechthinige Abhängigkeit)と似ている。総じてアウグステイヌスの思想は、生死罪惡、煩惱深重の反省を促す浄土教とは、思想的に共通の構造形式をもっている。

浄土教の教学では、信と行の關係が大問題となったが、西洋でも問題とされたのみならず、インドのヴィシヌ教でも同じ問題が盛んに論議され、「猿猫論争」として知られている。〔猿猫(ヴァダガライ派)の主張は、猿の仔が危険に陥ると、母猿は仔猿をかかえ、仔猿は母猿にしがみつこうように、救済には信による恩寵と行とを必要とするという。猫派(テンガライ派)は、主張する。

猫の仔が危険に陥ると、母猫は仔猫を口にくわえて逃げる。仔猫は何もしなくてもよい。そのように人は信のみによって救われるのだ、と言う。〕

純粹の信仰を強調した点では、浄土教と多分に共通の要素をもつ日蓮の仏教は、強烈な精神の持ち主で、当時の墮落した宗教を激しく攻撃して、ついに極刑に処せられたサヴォナローラと、類型的に共通である。イタリヤの運命に関するサヴォナローラの予言は、日蓮の『立正安国論』を想い起こさせる。

日蓮の宗教は種々の要素を混在させているが、「南無妙法蓮華経」と唱えるだけでも救われると説いた点では、易行の立場にあるといえよう。

仏によつてすでに救われているという思想は、日本天台の本覚法門の説くところである。もとは口伝法門であったが、最澄、良源、源信などの教えとして伝えられている多くの偽書がある。われらは煩惱を起こし、生死のうちに沈んでいるが、われらは本来仏なのである。有情ばかりではなくて、非情草木といえども、本来、真如、仏である、と説く。この点は、ヘレニズム末期のディオニシウス・アレオバギタの書といわれる偽書と対比して考究するべきである。この書はのちに神秘主義者たちに大きな影響を及ぼした。

日本の仏教には、自らの力による修行を強調する一つの大きな流れがある。それは禪である。

禪の独自の特徴はシナで形成されたものであるが、その成立当初には古来の権威を否定したために、固定観念を捨てようとした。

したがって禪僧の行動にはときには常軌を逸したように思われる点もあったが、それは自己の自主性を失いたくなかったためである。その態度に対応するものは、ギリシアのキニコス学派（犬儒派、キニコス派）であろう。この学派の創始者であるアンティステネスとその唯一の有名な弟子ディオゲネスとは、その行動が唐宋の若干の禅僧や寒山・拾得などに似ている。インドでこれらに対比するべきものは、シヴァ神を崇拜していた獣主派であろう。しかし日本に入って来た禅は、奇矯な行動に走ることなく、「行持綿密」といわれるように、つつしみ深い、道元によって代表されるようなものになった。道元は坐禅を行い、修行のうちにさとりがある（修証一如）ということを説いたが、絶対者の否定的性格を強調した点では、ドイツのエックハルトを思わせる。しかも年代的に東西同時である。さらに、この時代には、エックハルトのみならず、ドイツ、オランダにはこの時代に幾多の神秘家が輩出した。

禅は「衆生本来仏なり」（白隠）の立場をとっているが、この立場は決してキリスト教に無縁ではない。恐らくペラギウスあたりから始まるのであろうが、人間性の善なることを信ずるのである。エックハルトも神の本質は善であり、「善がそれ自身として本来存すること」が教えられねばならぬ、と説いた。近世にもこ

ういう思想が尾を引いている。

中世の教権が弱まるとともに、近世に入るが、安土桃山時代の文化はしばしばルネサンスに譬えられる。

まず中世的思惟に対する、批判乃至反逆が起こった。その代表的な実行者織田信長は、ほぼ同時代のアケバル大帝と対比するべきである。

貝原益軒（一六三〇—一七二四）は、研究者は偏見に陥ってはならぬといい、「自己の聞見」にたよるべきことを主張し、誤った態度四つを指摘しているが、それはフランシス・ベーコン（一五六—一六二六）が指摘した四つの偶像（イドラ）にはほぼ一致する。近代的思惟は自我の自覚から始まるといわれるが、禅門では、天桂（一六四八—一七三五）は自己にたよるべきことを主張している。これはデカルトによる自我の自覚と対比するべきであろう。

こういう態度は、外界に対する合理的思惟の適用となって発現したが、特に、経験的な試みを強調する。奇蹟を疑うということは、鈴木正三の場合に顕著であるが、これは西洋では啓蒙時代の思想家にあまねく認められるところである。

はては唯物論を成立させる。日本の代表的な唯物論者は山片蟠桃であるが、近世ヨーロッパでは多数の唯物論者を輩出させている。インドではデーヴァートマという特異なる唯物論者が現れた。すべての価値基準は、人間に置かれることになった。禁欲的な傾向のあった仏教および儒学に対して昂然として理論的に反旗を

ひるがえしたのは、本居宣長、平田篤胤などの国学者であるが、インドではラーマクリシュナやヴィヴェカーナンダは、宗教の眞精神は、人間を愛することのうちにありと主張して、教義の差を無視するに至った。

人間を中心に考えると、人間のための経済活動が重視される。

鈴木正三は、禅僧でありながら、「坐禅をしてはならぬ。各人の職業に精励せよ」と説いた。職業倫理の宗教性ということは、西洋におけるカルヴィニズムの場合に顕著である。勤労というと、われわれは二宮尊徳を思い出すが、インドではカルマ・ヨーガ重視の思想となつて展開した。ネパールの哲人バントは、諸ウパニシヤッドの中から、特に行為を重視する『イーシャー・ウパニシヤッド』を奉ずるべきことを鼓吹した。

人間に対する評価が変わると、学問的思考も変化する。単なる伝承の学問ではなくて、思想の発展を歴史的に把握しようとする。富永伸基の『出定後語』『翁の文』は、西洋における東洋思想史研究に百年も先立っていて、西洋のフィロロギー（単なる文献学ではない）を予示する。三浦梅園の論理思想は、ヘーゲルの弁証法としばしば対比される。

やがて明治以後になると、西洋思想を大規模に摂取し、日本は急速に近代化することになった。

しかしその動きは輸入のみで、日本の思想家が外に思想家としてはたらしめかけたことは絶無に近い。日本の哲学者で、外国文で

著書を書いた人は殆んどいない。

僅かに、思想家としては、岡倉天心、新渡戸稲造、鈴木大拙、土田杏村などがいる程度ではなからうか。先年、日本ユネスコ国内委員会が日本の哲学的著書二冊を英訳（またはフランス語訳）したが、そののちこういう企画は途絶した。

しかしこのごろは、若い学者が海外に留学して、学位論文を外国語で書くということが相当に行われている。これらの学者の業績を、まとめて知らせ、国際的に批判を受けるということに努めるべきではなからうか。まとめて知らせるといふことは、一つの動きとなる。バラバラでは無視されたまままで終つてしまう。

（なかむら・はじめ、インド哲学・仏教学、名誉会長）